

構造改革特区への提案を

財団法人中小企業総合研究所 主席研究員 坂 東 輝 夫

「**構**造改革特区」が唱えられて、すでに2年余が経つ。最初の特区が認定されたのが昨年4月だから、それから数えてもまる1年が経ったことになる。いまや、全国各地で特区が走り出している。中小企業も特区に関心ではいられなくなった。

特区とは、地域を限定して規制を緩和・撤廃する制度を言う。実態に合わなくなった各種の規制が企業の自由な活動を妨げているのは、良く知られたことだろう。「規制緩和」を唱える企業や識者は多く、いまや規制を緩めることが時代を代表するスローガンになった感さもある。

ただ、規制を全国一律に緩和するのは口で言うほど簡単なことではない。国や自治体が許認可の権力を手放さないのは当然としても、規制あるがゆえに甘い汁を吸っている民間業者も多いからだ。官民とも規制には利害が錯綜しているのが現実である。規制を緩めようとする、全国的に蜂の巣をつついたような騒ぎが起ることは十分予想される。

そこで、まず地域を限って、その地域限りで規制を緩和・撤廃する

「特区」が発案されたのである。地域限定だから抵抗も少ないはずで、全国規模では無理な規制緩和をまず地域で実行してみようというのである。しかも、この方向は「中央から地方へ」という流れにも合致する。

事実、特区の制度がスタートしてからは規制改革の申請が相次ぎ、今年3月までに1700件近い提案が政府の構造改革特区推進室に寄せられた。このうち、全都道府県で324件の特区が認定され（3月の第4次認定分まで）、いまや特区を土台にした新しい試みが各地で進められるようになっている。

特区でもっとも知られているのは、どぶろく特区だろう。酒税法で定められている酒類の最低醸造量の規制を、農家が経営する民宿に限り撤廃するというものである。この結果、一定の基準を満たせば、どぶろくの製造が可能になった。すでに岩手県遠野市や新潟県東頸城郡ではどぶろくの出荷が始まっている。

このどぶろくの例で分かるように、これまで不可能だった事業が特区では可能になるのである。もちろん、特区で許された試みはどぶろくの製造に限らない。

株式会社の農業参入や学校経営など、以前は不可能だった事業が認められるようになっていく。

農業ではカゴメやワタミフードサービスがそれぞれ、和歌山と千葉で農業を手がけている。また、学校経営では東京リーガルマインドとデジタルハリウッドが大学と大学院を開校している。これら4社ほどの大企業ではないが、香川県の小豆島ではやはり地元の中小企業が遊休農地を借り受けて、地域資源であるオリーブの栽培、加工に取り組んでいる。

考えようによっては、これは素晴らしいことではないか。特区によって、企業が展開できる事業上のタブーが一つずつ打破されていくのだから。しかも、見逃せないのは、特区制度では誰もが規制改革について提案できるという点だ。地方自治体はもちろん、企業やNPO（非営利団体）、さらには個人までもが自分の思う規制改革を提案できる。

さらに、提案した規制改革は特区推進室が管轄官庁との調整作業に当たってくれる。その調整のプロセスもすべて、推進室のホームページで公開される。調整過程がガラス張りになり、うやむやになることがない。

もし、省庁が提案を受け入れない場合は、省庁側がその立証責任を負うことになっている。欲を言えばキリがないが、これほど民間の側が提案しやすいように設計された制度は珍しいのではないか。

つまり、ここでは「民」の側から規制

緩和を提案することが求められているのである。規制はお上のすることで、「民」は規制を変えられないという考えは捨てなければならないのである。

では、実際の提案状況はどうか。
1700件近い提案があったことは上に見た通りだが、推進室によると提案のほぼ7割が地方自治体からのもので、民間企業からの提案はわずか3割にとどまるという。それも、企業提案の多くは大企業からのもので、中小企業からの提案は数えるほどしかないそうだ。

もし、そうとするなら、情けないことではないか。せっかくの制度が準備されているというのに、中小企業の側はそれを利用していないのだから。規制緩和を気にしなくて済むほど、中小企業が自由に事業展開できているのなら、言うことはない。

しかし、そうだろうか。ベンチャーやニュービジネスの多くはおそらく多くの規制に事業の手を縛られているのが実情ではなかろうか。とするなら、その規制の壁を打ち破ろうとする気概が中小企業の側にあって当然ではないか。

ただ、中小企業からの提案の少なさを見ると、中小企業にそうした気概があるのかどうか、疑いたくなってくる。だが、今からでも遅くはない。特区制度を活用して、どういう規制改革ができるか、考えていこうではないか。特区制度に無関心というのでは、せっかくのチャンス逃がすことになるだろう。